

歴史を歩く 21

『戦国時代の群像』
第六話 新納氏の没落



薩州島津家当主 島津実久は天文6年(1537年)に清水城(霧島市国分)城主の本田董親を伴い、都城城主北郷忠相と飢肥城主島津忠朝と共に志布志へと赴いた。

志布志では新納忠茂が島津実久一行を迎えることになっていった。そして、ここには高山城主肝付兼続と禰寝院領主禰寝清年の両名も同席していた。ここに日向南部、都城、大隅地域において互いに争いあっていた領主が連座することになったのである。

この約一年前には、新納氏は、北郷忠相と島津忠朝の連合により所領を脅かされたばかりであった。また、この場に同席した肝付兼続は、新納忠勝と協力し合って島津忠朝勢力を駆逐した肝付兼興の子である。すでに天文2年(1533年)に兼興は亡

くなっており、家督を継承したのが兼続である。

さて、このように対立しあっていた豪族が志布志の地に集結したのは、島津実久の企みによるものであった。

天文3年(1534年)に始まった島津忠良・貴久親子の反撃に対抗して、島津実久は、日隅地域(日向諸県地域・大隅地域)の諸豪族と手を組み、一大勢力の構築を画策した。そして、この計画に賛同した島津忠朝、北郷忠相、肝付兼続、禰寝清年らは、志布志に集結し、このことを新納忠茂に持ちかけ、島津実久を守護職の座につけるための協力を求めたのである。

しかし、この計画について新納忠茂は、父忠勝に伺いを立てたのだが、忠勝の猛反対を受けることとなった。すなわち、忠勝にしてみれば、領土を巡って争いあっている

島津忠朝、北郷忠相と手を結ぶなどとは到底受け入れられない提案だったのである。

かくして、島津実久の描いた日隅諸豪族の大連合を背景とする島津忠良・貴久の排除と守護職の継承という筋書きは、新納氏によって実現されることなく、夢物語に終わったのである。

当然ながら、この件について新納氏は、ただで済まされるはずもなかった。実久は、島津忠朝、北郷忠相、肝付兼続とともに新納氏の肅清を図った。実久は生別府城(霧島市隼人)城主の榊山幸久を誘ってこの城を拠点とし、天文7年(1538年)1月3日には、都城の北郷忠相が新納氏の所領であった財部院を奪い、2月2日には梅北城(都城市)を占領した。

同年1月21日、飢肥・櫛間の島津忠朝は、甥の島津忠隅に大崎城を攻めさせ、肝付兼続も連合して大崎城攻略に参加している。1月29日には大崎城は陥落している。続いて3月20日、忠朝は

兼続とともに安楽城を落とし、その後夏井の砦を押さえ、7月23日には末吉城、松山城を落とした。

肝付兼続も島津忠朝とともに大崎城を攻めた後に、3月16日に崎園にあった大崎城の支城である野卸城を占領し、続いて安楽城を攻めた。7月13日には蓬原城を、同16日には恒吉城(曾於市大隅町)を攻め落とした。

こうして、島津忠朝、北郷忠相、肝付兼続によって三方から新納領は瞬く間に奪取され、とうとう本拠地である志布志を残すのみとなってしまった。そして天文8年(1539年)7月に忠朝、忠相、兼続の連合軍は、志布志総攻撃を開始した。新納忠勝・忠茂親子は島津忠良に使いを出して、救援を求めたが、忠良・貴久親子も、薩摩半島における実久派の豪族との攻防に追われていたため、新納氏の応援はできなかった。

7月26日にとうとう新納氏は降伏した。忠茂は母と共に、母方の実家である日向国佐土原の伊東義祐のもとに落ち延び、父忠勝は、

島津忠朝の計らいで櫛間の市木という場所を与えられ、隠居することとなった。そして、新納領は島津忠朝、北郷忠相、肝付兼続で分割されることとなった。島津忠朝は救仁院・末吉・松山を、北郷忠相は財部郷及び梅北の代地として三保院高城を領し、我が救仁郷の地は肝付兼続が領することとなる。

正平12年(1357年)に2代目新納実久が島津氏久によって志布志の統治を任されて以来、約180年間、新納氏は志布志を拠点として大隅半島における勢力を拡大してきた。しかし、その終焉はあまりにもあつけないものであった。(大崎町教育委員会 内村憲和)



▲志布志城跡